

2020 年度

保健医療総論改善ワーキング報告書

札幌医科大学保健医療学部

目次

1. 保健医療総論改善ワーキングの概要	1
2. 「保健医療総論」の目的・目標の検討	2
3. 「保健医療総論」における学修成果の評価	2
表 1 「保健医療総論」の全体目標と「保健医療総論 1～4」の概要・目標・学習内容 . . . 3	
表 2 「保健医療総論」の全体の目標到達に関するルーブリック評価	5
「保健医療総論」 評価表	6
表 3 「保健医療総論」の全体の目標と各質問番号	7
4. 「保健医療総論」への提言、及び課題	8
資料 1 2011 年の「保健医療総論」全体の目標	10
資料 2 「多職種連携」に関わる概念と方法に関する基礎知識	11
資料 3 評価に関する検討資料	16

1. 保健医療総論改善ワーキングの概要

1) ワーキングの検討課題：

○2018 年度総合教育評価による点検・評価に基づき、教務委員会を推進組織として改善・向上を図る取り組みが行われた。「保健医療総論」については「学習目的の理解」「チーム医療に関する学習効果」が不十分であり、「保健医療総論」に関するオリエンテーションや自己評価方法の工夫が必要であることが課題として挙げられた。保健医療総論教育企画委員会でこれらの対応について検討し、課題解決のために保健医療総論改善ワーキング（以下、本ワーキング）が設置された。

○2019 年 9 月 26 日に大日向学部長から本ワーキングの設置趣旨について説明があり、「保健医療総論」の教育内容・改善方法について検討することになった。

2) 担当者 リーダー：教 授 城丸瑞恵

保健医療総論 1 担当：教 授 池田 望 （科目責任者）

助 手 齊藤秀和 （コアメンバー）

保健医療総論 2 担当：教 授 長谷川真澄 （科目責任者）

准教授 菅原和広 （コアメンバー）

保健医療総論 3 担当：教 授 堀口雅美 （科目責任者）

助 教 青木信裕 （コアメンバー、保健医療総論教育評価ワーキング）

保健医療総論 4 担当：教 授 城丸瑞恵 （科目責任者）

准教授 後藤葉子 （コアメンバー、保健医療総論教育評価ワーキング）

保健医療総論教育評価ワーキングリーダー：准教授 澤田いずみ

3) 本ワーキングの会議開催

計 8 回の全体会議を開催した。また「保健医療総論 1～4」の各担当者会議、「保健医療総論」に関する知識・評価に関するグループ会議を適宜開催した。

4) 検討経緯：

○本ワーキングでは「学習目的の理解」「チーム医療に関する学習効果」を促進するために自己評価方法の検討が必要であるという前提から、評価と関連する「保健医療総論」全体の目標および「保健医療総論 1～4」の目標を検討した。全体の目標は資料 1（p10）にあるように 2011 年に設定されたが約 10 年経過しており、この間、学部のポリシーの改訂や社会情勢などの変化もあり改めて検討した次第である。「保健医療総論」全体の目的・目標の変更に伴い、「保健医療総論 1～4」の目標と学習内容を吟味した。この目標設定の際に、保健医療学部の教育目標、ディプロマ・ポリシー、「平成 30 年度保健医療総論教育評価報告書」を参考にして討議した。また、学生がチーム医療に関する理解を深める工夫として、「保健医療総論 1～4」のオリエンテーションに含めるチーム医療などの基本的概念について整理した。（資料 2, p11-15）

○本ワーキングの目的である自己評価方法の検討を行った。「保健医療総論」全体の目標に対す

る評価を検討するために、本ワーキングではルーブリック評価・ポートフォリオ評価の特徴、方法について文献（資料 3, p16）を用いて学習会を開催し、「保健医療総論」において導入する場合の利点や課題について検討した。その結果、ポートフォリオとルーブリックの併用は学習過程や改善点の可視化に有効であるが、それぞれの連動性を踏まえた評価の構築に関する資料は充分でなく、「保健医療総論」での併用評価は今後の課題とした。また、「保健医療総論」では自己評価の視点が明確になるルーブリック評価を用いることにした。

2. 「保健医療総論」の目的・目標の検討

「保健医療総論」の全体の目的・目標、「保健医療総論 1～4」の目標と学習内容は、「保健医療総論」に関連する下記の保健医療学部教育目標、ディプロマ・ポリシーを参考に検討した。

○保健医療学部教育目標：

保健・医療・福祉における自らの役割・機能を深く認識し、他職種を含む様々な立場の人々と連携・協働できる人材を育成する。

○ディプロマ・ポリシー：

保健・医療・福祉の実践を担う専門職、専門分野の発展に寄与する能力

- ・保健・医療・福祉にかかわる様々な人々と連携・協働する能力を身につけている。
- ・専門職としての役割と責任を認識し、高い倫理観をもって実践する能力を身につけている。

また、「平成 30 年度保健医療総論教育評価報告書」をもとに、「保健医療総論」を学習する上で必要となる能力の検討やチーム医療などの基本的概念を整理・検討した。その結果、チーム医療にかわり、多職種連携という用語を用い、「保健医療総論」の全体の目的・目標は以下の通りに設定した。また、「保健医療総論 1～4」の目標・学習内容との関連性は表 1 に示した。

全体の目的：保健・医療・福祉にかかわる様々な人々と連携・協働するために必要な能力を培う。

全体の目標：

- (1) 保健・医療・福祉における連携・協働の概念・方法に関する知識を理解する。
- (2) 多職種連携を推進するために礼節に基づいた基本的コミュニケーション力を身につける。
- (3) 多職種連携における主要な構成職種と役割を理解するとともに、自職種の役割を理解する。
- (4) 患者・サービス利用者とのパートナーシップに基づき、専門職種間で目標達成に向けたチームビルディングに関する方法を理解する。
- (5) 対象者の権利を擁護するための医療人としての倫理的態度を身につける。

3. 「保健医療総論」における学修成果の評価

「保健医療総論」の全体の学修成果の自己評価には、表 2 の通りルーブリック表を用いることにした。使用する場合の利点として、「保健医療総論 1～4」の 4 年間の学修過程・達成状況を可視的に簡便に評価することができる。学生は、「保健医療総論 評価表」(p6)を用いて 4 年次の「保健医療総論 4」終了後に自己評価を行う。

表 1 「保健医療総論」の全体目標と「保健医療総論1～4」の概要・目標・学習内容

保健医療総論の目的：保健・医療・福祉にかかわる様々な人々と、高い倫理観をもって実践する能力を身につける

科 目 全体の目標	保健医療総論 1	保健医療総論 2	保健医療総論 3	保健医療総論 4
概 要	保健・医療・福祉における他職種を含む様々な立場の人々と連携・協働できる基礎的能力醸成のため、コミュニケーションの構成要素や活用法、接遇の基本、情報リテラシー（倫理的取り扱い・管理方法）に関する講義やグループワーク、および実際のインタビュー体験を通して、基本的なコミュニケーションの概念と技術、および倫理的態度を学ぶ。	介護老人保健施設、介護老人福祉施設、通所系サービスを利用している高齢者と実際にコミュニケーションをとり、さらに援助場面の見学や参加を通して、対象者の理解に基づいたコミュニケーションの重要性と、保健医療福祉専門職の役割を知ることが目的とする。さらに、世代や立場が異なる様々な人との関わりから考え方の多様性を理解し、今後の学習活動のレディネスを高める。	チーム医療において他の医療専門職との連携を図る能力を身につけるために、医療機関において他の保健医療専門職の役割を理解する。本科目における他の医療専門職とは看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を指す。具体的には看護学科の学生は、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士と同行、理学療法学科および作業療法学科の学生は看護師と同行し、各職種の専門性を理解する。他の保健医療専門職と行動を共にして業務を体験することにより、他の医療専門職の視点から自分の目指す専門職の理解を深めることを目的とする。	健康障害をもつ対象へのインタビュー・対象者評価・支援計画の立案を通じて、多職種連携の意義と方法について理解することができる。また、グループ討議に能動的に参加して自職種及び他職種の特性・専門性・役割について考え、その内容についてグループ間で共有して深めることができる。
全体の目標 1： 保健・医療・福祉における連携・協働の概念・方法に関する知識を理解する	1) 各学習課題の遂行体験を基に、多職種連携の基盤となる基本的なコミュニケーションの重要性を理解し、自己の課題を述べることができる。 2) コミュニケーションの構成要素とその特徴を述べることができる。 3) 基本的接遇に必要な振る舞い方とマナーを述べることができる。 4) 報告、連絡、相談の重要性を述べることができる。 5) 自らのコミュニケーションを振り返り、課題を述べることができる。	高齢者の生活を支援する場における多職種連携の目的・方法を知ることができる。 1) 介護施設における多職種連携の目的・方法を述べることができる。 2) 介護施設と医療施設における多職種連携の共通点と相違点を述べることができる。	保健医療専門職の役割について、施設の機能と関連させた説明ができる。	これまでの多職種連携に関する知識を踏まえ、異なる専門領域と協働した対象者への実践的なアプローチを通して、多職種による連携の重要性を説明することができる。
全体の目標 2： 多職種連携を推進するために礼節に基づいた基本的コミュニケーション力を身につける	1) 礼節ある基本的対人コミュニケーションを実践できる。 2) インタビューの実施に伴う一連の手続きを実践できる。 3) 時と場所等をわきまえて適切なコミュニケーション技法を用い、必要な情報を得ることができる。 4) インタビューの時間配分や場所の設定を適切に行える。 5) 必要な情報を得るために、適切な言葉づかいで相手の回答に合わせた質問が行える。	対象者の理解に基づいたコミュニケーションの実践をとおして、その重要性を理解できる。 1) 事前学習に基づき、加齢による変化や疾病をもつ対象者に配慮したコミュニケーションができる。 2) 実習体験をとおして、対象者の特徴に応じたコミュニケーションのあり方を述べることができる。	他の保健医療専門職との連携に必要な能力について、学内学習および実習を踏まえて自分の意見を述べることができる。	1) 礼節ある対応をおこない、対象者の安全・安心に配慮できる。 2) 意図的な情報収集から支援計画を作成する過程において、グループでの合意を見出すために、自分の意見を述べ、相手の意見に傾聴できる。
全体の目標 3： 多職種連携における主要な構成職種と役割を理解し、自職種の役割を理解する		対象者に関わる保健医療福祉職の種類と役割を知るとともに、保健医療専門職を目指す学習者としての自己の課題を認識できる。 1) 対象者に関わる保健医療福祉職の種類と役割を述べることができる。 2) 保健医療専門職をめざす学習者としての自己の課題を述べることができる。	他の保健医療専門職との同行体験を通して、自分が目指す職業の専門性を説明できる。	自職種及び他職種の特性・専門性・役割について説明できる。
全体の目標 4： 患者・サービス利用者とのパートナーシップに基づき、専門職間で目標達成に向けたチームビルディングに関する方法を理解する		本学習課題の達成という目標に向け、学生・教職員・施設職員で構成される学習チームの一員として主体的かつ協働的に行動できる。 1) 学習チームの一員として、学生メンバーおよび教職員や施設職員と主体的にコミュニケーションができる。 2) 世代や立場の異なる人との関わりから、考え方の多様性について述べることができる。 3) 学習課題達成のために、学習チームの一員としての役割を果たすことができる。	他の保健医療専門職との連携に必要な能力について、学内学習および実習を踏まえて自分の意見を述べることができる。	健康障害を持つ対象者へのインタビュー、評価、目標・支援計画の立案を通して、専門職種間でどのように協働して目標を達成するか説明できる。

全体の目標 5： 対象者の権利を擁護するための医療人としての倫理的態度を身につける	将来医療人を目指すものとして必要な倫理的態度の基本を理解し、その概要を述べることができる。 1) インタビュー対象者の個人情報保護することの必要性を理解し、必要な対応を行うことができる。	対象者の安全・安楽を守り、医療人としての倫理的態度に基づいた行動ができる。 1) 対象者のプライバシーに配慮し、尊重した態度で接することができる。 2) 対象者の安全・安楽を守るために、施設職員へ必要に応じて報告・連絡・相談ができる。 3) 「実習等における個人情報の取り扱い指針第3版」に基づき記録・情報の管理ができる。	医療人を目指すものとして必要な倫理的態度に基づく行動をとることができる。	医療人を目指すものとして、真摯な姿勢で学習に参加し、多様な価値観を尊重することができる。
方 法	5名の3学科混成グループを編成し、メンバーと協調作業を経験する中で以下を行う。 1. 基本的な対人コミュニケーションに関する講義を受ける。 2. コミュニケーションスキルに関わるロールプレイングする。 3. 大学教職員に対するインタビューを準備および実施する。 4. 学習経験をまとめ、医療人におけるコミュニケーションのあり方について発表する。	3～4名の3学科混成グループを編成し、高齢者が利用する介護施設、通所サービスにおいて2日間の施設実習を行う。学生は、高齢者との会話、援助場面の見学または参加観察を行い、指定の様式に学習内容を記録する。 3日目は学内において、各施設での学びを共有し深めるために、施設混在グループで指示された課題について討議を行った後、複数の教室に分かれて教室ごとに報告会を行う。	1. 学内学習 1) 各職種の役割・機能に関する講義・実習前の準備学習： 同職種グループ学習 2) 実習後のまとめ： 同職種グループ学習 3) 報告会： 混合グループでの発表と質疑応答 2. 実習 1) 医療専門職と行動を共にする。 ・(学生) 看護学科 + (専門職) 理学療法士、作業療法士、言語聴覚士 ・(学生) 理学療法学科、作業療法学科 + (専門職) 看護師 2) 承諾が得られた場合、対象者とコミュニケーションを取る。 3) 実習の最後に、実習記録表を記入しまとめる。 各自が体験した学びを実習指導者に報告し助言を得る。	4グループ(8班)を編成し、障害を有する特別講師1名に対して、2班合同で情報収集(インタビュー)を行い、その対象者のアセスメントを各班で実施する。その後、討議を行い、各職種の専門性を生かした目標設定・支援計画の立案を実施する。次にインタビュー・支援計画立案から得られた経験を踏まえてチーム医療の意義・自己の職種・他の職種の専門性についてグループ討議を行う。
参考： 現行の到達目標	1. 基本的対人コミュニケーションを実践できる。 2. 医療人として必要な倫理的態度の基本を理解し、その概要を述べることができる。 3. 時と場所などをわきまえて適切なコミュニケーション技法を用い、必要な情報を得ることができる。 4. 個々に経験した課題を基に、将来医療人を目指すものとしての基本的なコミュニケーションの重要性を議論し、自己の課題を述べることができる。	1. 対象者との関係を築く姿勢をもつことができる。 2. 対象者との関わりから、健康状態や障害、コミュニケーションの特徴について自分の意見を述べることができる。 3. 対象者との関わりを通して、過去や現在の生活状況、生活する環境について自分の意見を述べることができる。 4. 対象者と関わる保健医療福祉専門職の種類と機能を説明することができる。 5. 対象者の安全・安楽を守りながら実施することの大切さを理解し、保健医療福祉職者として倫理的に関わるすることができる。 6. 様々な人との関わりを通して知りえた考え方の相違について、自分の意見を述べることができる。	1. 保健医療専門職の役割・機能について説明できる。 2. 他の保健医療専門職との同行体験を通して、自分が目指す職業の専門性を説明できる。 3. 他の保健医療専門職とのパートナーシップを形成するために、必要な能力について自分の意見を述べることができる。 4. 医療人としての倫理的態度に基づく行動できる。	1. 地域で生活する対象者の課題を評価(アセスメント)し、課題解決に向けて必要な支援について意見を述べることができる。 2. 各学科で注目するポイントやアプローチ方法に相違があることに気付くことができる。 3. 多職種によるチーム医療の意義を説明することができる。 4. 他職種の理解とともに自職種の特性、専門性、役割について説明することができる。

※保健医療学部 of 教育目標、ディプロマ・ポリシー、下記文献などを参考に作成した。

- 1) 森田敏子, 上田伊佐子編. 看護教育に活かすルーブリック評価実践ガイド, メヂカルフレンド社, 2018
- 2) タネル・スティーブンス, アントニア・レピ (編). 佐藤浩章 (監訳). 大学教員のためのルーブリック評価入門, 玉川大学出版会, 2014

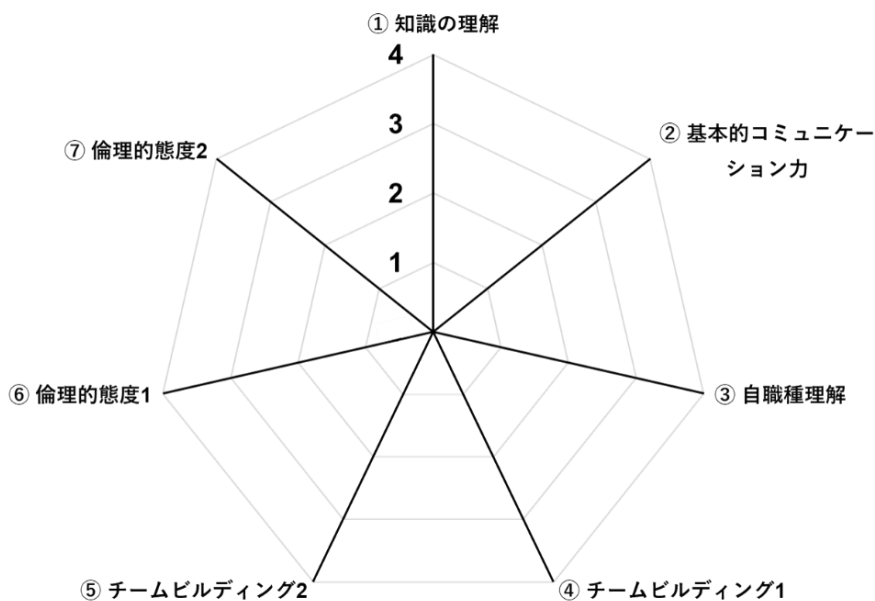
表 2 「保健医療総論」の全体の目標到達に関するルーブリック評価

フェーズ 全体の目標	フェーズ 4	フェーズ 3	フェーズ 2	フェーズ 1
1) 保健・医療・福祉における連携・協働の概念・方法に関する知識を理解する	保健・医療・福祉における連携・協働が必要な理由、方法を、具体的な状況に当てはめて説明し、今後の課題を述べることができる。	保健・医療・福祉における連携・協働が必要な理由、方法を、具体的な状況に当てはめて説明できる。	保健・医療・福祉における連携・協働が必要な理由、方法を、総論的に説明できる。	保健・医療・福祉における連携・協働が必要な理由、方法について説明できない。
2) 多職種連携を推進するために礼節に基づいた基本的コミュニケーション力を身につける	礼節に関わる基本的マナーに基づき、相手の安全・安心に配慮し、相手の発言を促進しながら、目的を持って相手の話を聞き、自分の意見を述べることができる。	礼節に関わる基本的マナーに基づいて、目的を持って相手の話を聞き、自分の意見を述べることができる。	礼節に関わる基本的マナーに基づいて、相手の話を聞き、自分の意見を述べることができる。	礼節に関わる基本的マナーが不足しており、相手の話を聞き、自分の意見を述べるできない。
3) 多職種連携における主要な構成職種と役割を理解し、自職種の役割を理解する	保健医療総論の学習経験に基づいて、自己職種及び他職種の特性・役割について具体的に説明でき、自他職種理解に関わる今後の目標を述べるができる。	保健医療総論の学習経験に基づいて、自己職種及び他職種の特性・役割について具体的に説明できる。	自職種及び他職種の特性・役割について概要を説明ができる。	自職種の特性・役割に関する説明できない。
4) 患者・サービス利用者とのパートナーシップに基づき、専門職間で目標達成に向けたチームビルディングに関する方法を理解する	チームの目標達成に向けて、対象者の特徴・チームメンバーの職種に応じて、分かりやすい言葉を意識して質問・説明ができ、グループメンバーを助ける発言ができる。	チームの目標達成に向けて、対象者の特徴・チームメンバーの職種に応じて、分かりやすい言葉を意識して質問・説明ができる。	チームの目標達成に向けて、対象者・チームメンバーに対して、自職種の立場で質問・説明できる。	チームの目標達成に向けて、対象者・チームメンバーに対して、質問・発言できない。
	目標達成に向けたチームの在り方並びにチームメンバーとしての自己の課題を捉え、今後の取り組みについて具体的に説明できる。	目標達成に向けたチームの在り方並びにチームメンバーとしての自己の課題について具体的に説明できる。	目標達成に向けたチームの在り方について述べられるが、メンバーとしての自己の課題について説明できない。	目標達成に向けたチームの在り方並びにチームメンバーとしての自己の課題について説明できない。
5) 対象者の権利を擁護するための医療人としての倫理的態度を身につける	対象者の権利を擁護するための医療人としての倫理的態度の必要性を理解し、義務・規則を遵守し、どのような状況においても自らの言動を多角的に省察できる。	対象者の権利を擁護するための医療人としての倫理的態度の必要性を理解し、義務・規則を遵守し、自らの言動を省察できる。	対象者の権利を擁護するための医療人としての倫理的態度の必要性を理解し、義務・規則を遵守できる。	対象者の権利を擁護するための医療人としての倫理的態度の必要性の理解が不足し、義務・規則の順守が不十分である。
	与えられた学習を超えて、自己の課題を意識し、向上のための努力ができる。	与えられた学習を超えて、自己の課題を意識できる。	与えられた課題の範囲で学習している。	与えられた課題に必要な学習を行っていない。

「保健医療総論」 評価表

この評価表は、保健医療総論全体の目標について、受講した皆さんの自己評価を記載するものです。裏面の表の各質問番号について、表の右欄にある文章から自分が最も当てはまるものを選択し、下の図にプロットし線を結んでください。

学科：_____ 名前：_____ 記入日：_____ 年 _____ 月 _____ 日 _____



各項目でそのフェーズとした理由（自由記載）

- ① : _____
- ② : _____
- ③ : _____
- ④ : _____
- ⑤ : _____
- ⑥ : _____
- ⑦ : _____

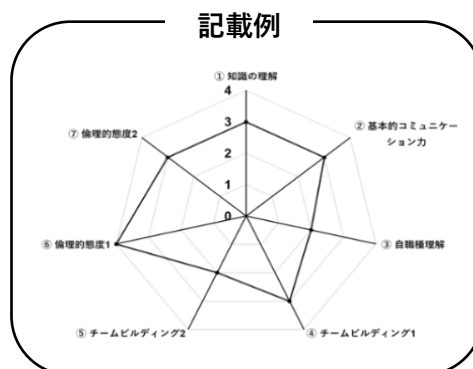


表 3 「保健医療総論」の全体の目標と各質問番号

目標	質問番号	フェーズ 4	フェーズ 3	フェーズ 2	フェーズ 1
1) 保健・医療・福祉における連携・協働の概念・方法に関する知識を理解する	①	保健・医療・福祉における連携・協働が必要な理由、方法を、具体的な状況に当てはめて説明し、今後の課題を述べることができる。	保健・医療・福祉における連携・協働が必要な理由、方法を、具体的な状況に当てはめて説明できる。	保健・医療・福祉における連携・協働が必要な理由・方法を、総論的に説明できる。	保健・医療・福祉における連携・協働が必要な理由、方法について説明できない。
2) 多職種連携を推進するために礼節に基づいた基本的コミュニケーション力を身につける	②	礼節に関わる基本的マナーに基づき、相手の安全・安心に配慮し、相手の発言を促進しながら、目的を持って相手の話しを聞き、自分の意見を述べることができる。	礼節に関わる基本的マナーに基づいて、目的を持って相手の話しを聞き、自分の意見を述べることができる。	礼節に関わる基本的マナーに基づいて、相手の話しを聞き、自分の意見を述べることができる。	礼節に関わる基本的マナーが不足しており、相手の話しを聞き、自分の意見を述べるができない。
3) 多職種連携における主要な構成職種と役割を理解し、自職種の役割を理解する	③	保健医療総論の学習経験に基づいて、自己職種及び他職種の特性・役割について具体的に説明でき、自他職種理解に関わる今後の目標を述べることができる。	保健医療総論の学習経験に基づいて、自己職種及び他職種の特性・役割について具体的に説明できる。	自職種及び他職種の特性・役割について概要を説明ができる。	自職種の特性・役割に関する説明できない。
4) 患者・サービス利用者とのパートナーシップに基づき、専門職間で目標達成に向けたチームビルディングに関する方法を理解する	④	チームの目標達成に向けて、対象者の特徴・チームメンバーの職種に応じて、分かりやすい言葉を意識して質問・説明ができ、グループメンバーを助ける発言ができる。	チームの目標達成に向けて、対象者の特徴・チームメンバーの職種に応じて、分かりやすい言葉を意識して質問・説明ができる。	チームの目標達成に向けて、対象者・チームメンバーに対して、自職種の立場で質問・説明できる。	チームの目標達成に向けて、対象者・チームメンバーに対して、質問・発言できない。
	⑤	目標達成に向けたチームの在り方並びにチームメンバーとしての自己の課題を捉え、今後の取り組みについて具体的に説明できる。	目標達成に向けたチームの在り方並びにチームメンバーとしての自己の課題について具体的に説明できる。	目標達成に向けたチームの在り方について述べられるが、メンバーとしての自己の課題について説明できない。	目標達成に向けたチームの在り方並びにチームメンバーとしての自己の課題について説明できない。
5) 対象者の権利を擁護するための医療人としての倫理的態度を身につける	⑥	対象者の権利を擁護する医療人としての倫理的態度の必要性を理解し、義務・規則を遵守し、どのような状況においても自らの言動を多角的に省察できる。	対象者の権利を擁護するための医療人としての倫理的態度の必要性を理解し、義務・規則を遵守し、自らの言動を省察できる。	対象者の権利を擁護するための医療人としての倫理的態度の必要性を理解し、義務・規則を遵守できる。	対象者の権利を擁護するための医療人としての倫理的態度の必要性の理解が不足し、義務・規則の順守が不十分である。
	⑦	与えられた学習を超えて、自己の課題を意識し、向上のための努力ができる。	与えられた学習を超えて、自己の課題を意識できる。	与えられた課題の範囲で学習している。	与えられた課題に必要な学習を行っていない。

4. 「保健医療総論」への提言、及び課題

本ワーキングの目的は、「保健医療総論」の教育内容・改善方法について検討することであり、特に「チーム医療に関する学習効果」「学習目的の理解」の促進のために下記について検討・実施した。

- 1) 「保健医療総論」全体の目的および目標と「保健医療総論1～4」の目標を設定した。また「保健医療総論1～4」の学習内容を検討した。(p3, 4)
- 2) 「保健医療総論」を学習する上で必要な基本的知識を整理した。(資料2, p11-15)
その結果、チーム医療にかわり、多職種連携という用語を用いることとした。
- 3) 「保健医療総論」の全体の目標について学生が自己評価するためにルーブリック評価を作成した。(p5-7)

これらのことを踏まえて提言事項と今後の課題について述べる。

1) 学習目的・目標の理解

学習目的の理解を促進するために「保健医療総論」全体の目的と目標を整理した。また、その目的・目標に即した「保健医療総論1～4」の目標・内容を検討した結果、全体の一貫性が確保されたと考える。さらに全体を俯瞰できる表を作成したため、学生は1年次から4年次の目標と学習過程の理解が深まると期待する。この表を用いて各学年の保健医療総論オリエンテーション時に「保健医療総論」の全体の目的・目標・進行過程と当該学年の目標・内容について説明を行う。

2) チーム医療 / 多職種連携に関する基礎知識の活用と学習効果

チーム医療に関する学習効果をあげるために、チーム医療とは何か、チーム医療を担うための力とは何かについて検討した。その結果、保健医療福祉領域における「多職種連携」が求められる背景やチーム医療を含む用語の整理、連携に必要な技術を提示した。これらは「保健医療総論1～4」のオリエンテーションや実施の際に活用する。具体的な活用方法については、今後「保健医療総論1～4」で検討する。

3) 評価方法

「保健医療総論」の全体の目標に関する評価内容について整理・策定した。これは学生が4年間で「保健医療総論」全体の教育目標に向かって培う方向性を示し、また4年間の積み重ねを自己評価する指針として活用する。具体的には、4年次の「保健医療総論4」の終了後に「保健医療総論評価表」(p6)を用いて自己評価する。評価表は1部を保健医療総論4担当教員に提出して結果をまとめ、学部として全体的傾向について把握する。

《2021年度以降の「保健医療総論1～4」要項に含まれる内容》

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 「保健医療総論」の全体の目的・目標と「保健医療総論1～4」の概要・目標2. 「保健医療総論」の全体の目標と評価3. 「多職種連携」に関わる概念と方法に関する基礎知識 |
|---|

なお、上記 1) 2) 3) はそれぞれの相互作用によって学習目的・目標の理解が深まり、チーム医療に対する学習効果が生じると考える。1) 2) 3) の妥当性については、今後検証が必要となる。また、「保健医療総論 1～4」の評価方法については、各々の総論の中で検討する。

資料 1 2011 年の保健医療総論全体の目標

目標：

医療人としての自覚を深め、素質を育成することをねらいとする。さらに 3 学科合同で取り組むことによって多職種チームアプローチを学ぶ。また、新学期のはじめに開講することで、学びへの動機づけを促す。

○ 2011 年（平成 23）年度 「保健医療総論」検討に係るワーキング

委員長：教授 小塚 直樹（カリキュラム委員）

副委員長：准教授 中村真理子（カリキュラム委員）

委員：准教授 古名 丈人（カリキュラム委員）

講師 正岡 経子（カリキュラム委員）

准教授 坂上 真理（学科長指名）

講師 仲田みぎわ（学科長指名）

講師 小島 悟（学科長指名）

資料 2 「多職種連携」に関わる概念と方法に関する基礎知識

1) 保健医療福祉領域における「多職種連携」が求められる背景

医療の高度化、細分化、分業化が進み、職種間の連携不全による医療事故やケアの質の低下が課題となっている。また、生活習慣病が増加し、さらには超高齢社会を迎えた現代、健康問題はより複雑化し、ひとつの領域のみで治療・ケアを行うことは困難となっている。一人一人の生活の質の向上に寄与し、安全・安心なケアを提供するために、医療分野に限らず、多くの職種と連携することは不可欠なものになっている。保健医療福祉従事者の不足も課題となる中、各職種が互いの役割を理解し、円滑なコミュニケーションを取り、効率的に質の高いサービスを提供することが求められている。

2) 保健医療福祉領域における多職種連携における用語の定義

(1) 「連携」の定義

「援助において、異なった分野、領域、職種に属する複数の援助者（専門職や非専門的な援助者を含む）が、単独では達成できない、共有された目標を達するために、相互促進的な協力関係を通じて、行為や活動を展開するプロセス」（山中、2003）

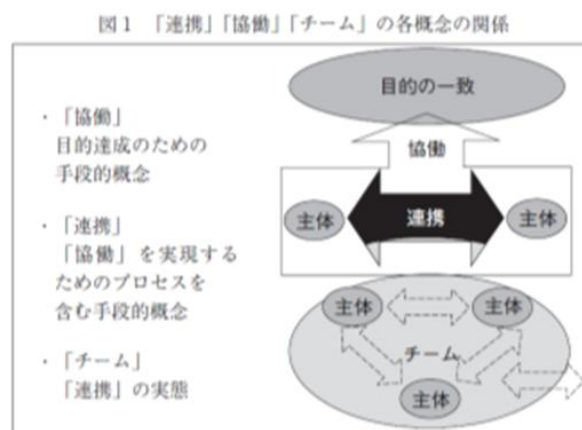
(2) 基本概念の関係（図 1）

連携：目的を達成するための協働を実現する過程を含む手段的概念。

チームワーク：連携過程の最終的な段階

チーム：連携概念が可視化された実態

協働：同じ目的を持つ複数の人及び機関が協力関係を構築して目的達成に取り組むこと



引用：文献1）吉池・栄（2007）より抜粋

(3) 保健医療に関わる連携関連用語の定義

多職種連携：共通の目的を達成するための、援助に関わる様々な立場や職種間での「連携」

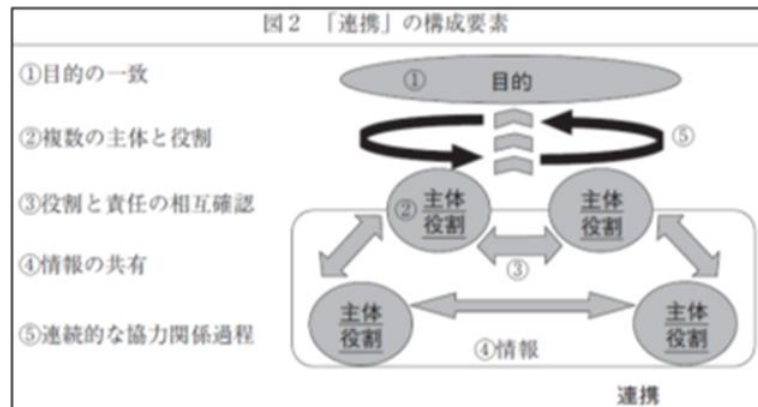
チーム医療：医療施設において医療に従事する様々な職種が連携することにより、患者の状況に的確に対応した医療を提供すること。

（地域）医療連携：複数の医療機関がその地域の医療事情に応じて、それぞれの医療機能の分担と専門化を進め、それらの医療機関同士が連携することにより、患者が地域で継続性のあつ適切な医療を受けられることを目指した医療体制。

3) 連携の構成要素とチームワークの類型

(1) 連携の構成要素 (図 2)

- ① 一致した目的を持ち、
 - ② 専門職に限らない多様な分野、領域、職種といった複数の主体がそれぞれの役割を持ち、
 - ③ 役割を相互に理解し、
 - ④ 必要な情報を共有し、
 - ⑤ 協力的な関係を継続して目的を達成すること
- が、連携を構成する要素である。



引用：文献1) 吉池・栄 (2007) より抜粋

(2) チームワークモデルの類型 (表 1)

連携過程の最終段階であるチームワークには次のような類型がある。それぞれが対応する健康ニーズ、実践される場によって、各機関の関係性は異なる。地域における生活を支える多職種連携においてはトランスモデルの実現が求められる。

表1 チームワークモデルの特徴

	相互作用性	役割の開放性	階層性
マルチモデル (権威モデル)	〈小〉 独立実践が基本	〈無〉 専門職の役割の明確化 高度な専門性の駆使	〈有〉 医学モデルに基づく課題は専門職別に達成
インターモデル (コンセンサスモデル)	〈大〉 専門職相互の意思決定	〈一部あり〉 役割の重複・平等主義	〈無〉 異なるスキルを用いて専門職が協働
トランスモデル (マトリックスモデル)	〈大〉 他専門職の知識技術の相互吸収	〈有〉 役割の代替可能性 高度な技術使用の可能性は低い	〈無〉 意思決定過程における専門職の知識技術の寄与・相互依存性と平等性

引用：文献1) 吉池・栄 (2007) より抜粋

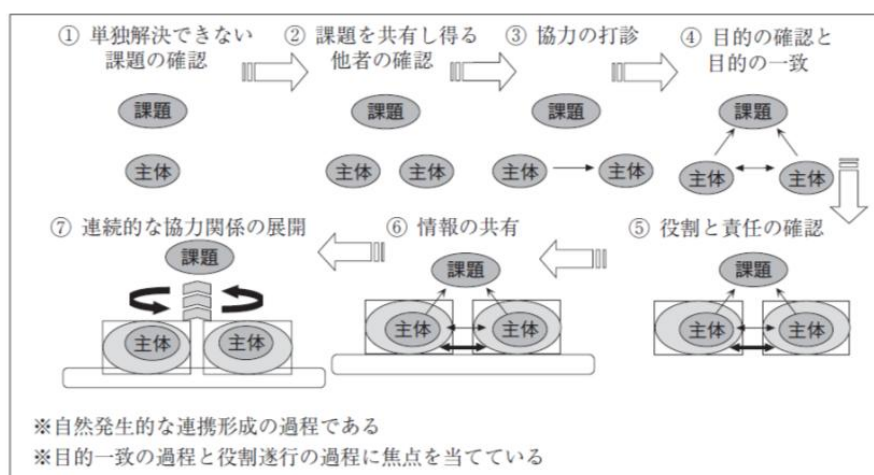
4) 「連携」の目的と過程

連携の目的は、患者やクライアントの健康や幸福であり、援助の主体はクライアント本人である。しかし、集団の性質として自分たちの集団の安全と豊かさを求める側面があり、これがクライアント中心の連携を困難にする側面ともなる。連携が展開する過程 (図 3) には、単独で解決できない課題が連

携の必要性を生み、目的を一致させながら、お互いの役割に違いを認識し、期待と失望を繰り返すなど葛藤しながら現実的な役割と責任を確認していく過程がある。この過程を経て有効な情報共有がなされ、継続的な協力関係が築かれていく。

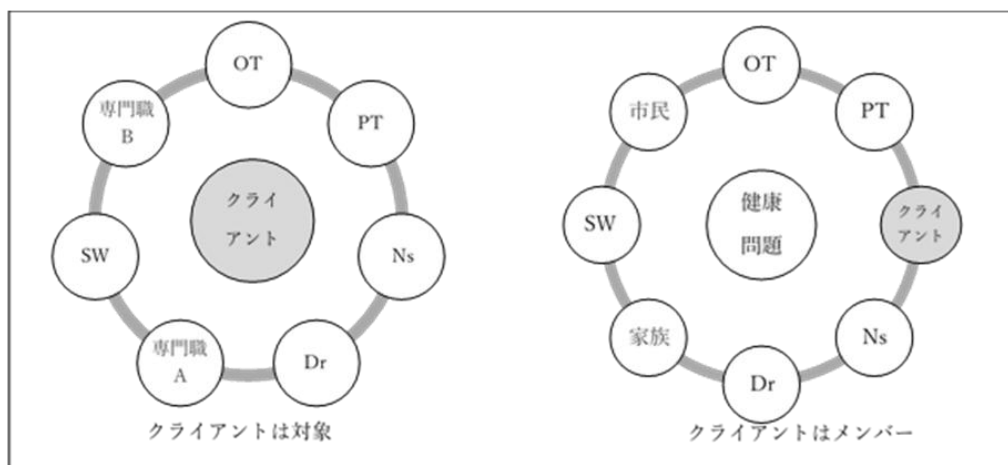
その過程には、対人関係要因、組織的要因、制度的要因が影響する。これらの要因を理解しながら、クライアントの健康と幸福を目指すという目的を明確に持ち、互いの役割を理解していくことが連携を展開するために必要である。最近ではクライアント自身も連携の一員であり、さらには家族、そしてボランティアなどの一般市民も含めて連携を考える場合もある。療養の場が病院から地域へと移行し地域包括ケアシステムの構築が求められる中、専門職の枠を超えて、地域住民も含めたクライアント中心の連携の実現が模索されている。

図3 「連携」の展開過程



引用：文献1）吉池・栄（2007）より抜粋

図4 クライアントを中心とした2つの連携モデル



5) 「連携」に必要な技術（文献2）

（1）チーム作りの技術

連絡：別個の組織内における随時の情報交換（コミュニケーション）

自分たちが自職種として何をしていて、何に困り、何をしたいと思っているのか、明確にして、見返りを求めるのではなく、まず情報発信する。

連携：異なる組織の定期的な業務提携（コーディネーション）

多職種や他組織と共通に目標が見えた時、具体的な業務の遂行を通じて、お互いの役割を理解しながら連携のあり方を模索する。

統合：一つの組織として恒常的につながる（インテグレーション）

恒常的なつながりを維持し、ルールと役割分担を明確に文章化したり、役割を再配分したりする。

（２）伝える技術

プレゼンテーション：

職種が異なれば使用する言葉も異なり、同じ言葉でも意味が異なる場合がある。これを踏まえて、解説を加えたり、あいまいにせず確認したりしながら説明する。事例提示の基本情報（ジェノグラム、生活歴、病歴、ADL、エコマップなど）についての共通フォーマットを作成しておくことも有用である。

コミュニケーション：

事実 → 解釈 → 仮説 → 結論 → 確信のプロセスをメンバーで共有できるように話を進める。確信から議論するのでなく、事実を共有する。丁寧に話す、相手の話を聞いて保留する、相手の立場を想像するなどの技術が役立つ。

交渉：

見解が異なる場合、一方的に頼み込むのではなく、ウィン・ウィン交渉となるように、相手が求めていることを確認し、相手にとっての新たな意義を見出しながら、順序良く情報を提示し、妥当点をさぐる。目標の立て方、相手を知ること、プレゼンテーション、タイミング、誠実さ、ユーモア、忍耐力など総合的な力が求められる。

会議の仕組みづくり：

話し合える環境をつくるために、クライアントについて話し合う会議の他、集団組織のチーム作りを話し合うための会議を設定する。

（３）ケア会議の運営技術（ファシリテーションスキル）

第１段階：場のデザイン

会議の目的を明確にし、メンバーを選定する。５、６～１０名で、今関わっている人の他これから関わる人も構成員とする。集まりやすい場所、時間を設定し、ホワイトボード、検討課題を簡単に記載した資料など準備する。会議の冒頭で、目的、ルールなどを説明し、自己紹介を促す。ユーモアやエクササイズを促すなど、緊張をほぐす技術も役立つ。

第2段階：対人関係

各自が意見を出しやすくなるように、非言語的メッセージに留意しながら、発言の機会をつくり、質問したりしながら、互いに傾聴する。意見の位置づけを整理しながらホワイトボードに記録する。

第3段階：構造化

出てきた意見をかみ合わせ、アセスメントしプランニングを行う。
特定のフレーム*を利用することも討論を助ける。

第4段階：合意形成

意見をまとめて、チームとしての意思決定をする。葛藤がある場合、改めて検討したり、メリット・デメリット表を作る、優先順位をつけたりする。

(4) 記録の方法

ホワイトボードを有効に活用し、情報を可視化し共通理解を助ける。

* 参考資料：事例検討の進め方（フレーム）の例

- ① 野中方式編：文献 2
- ② ICF 方式：ICF の考え方を取り入れた個別支援計画策定の手引き
(<https://www.npo-osc.com/old/data/06.pdf>)
- ③ 気づきの事例検討：渡部律子：基礎から学ぶ 気づきの事例検討会、中央法規、2007
- ④ 日本看護協会方式：実践力 UP 事例検討会～みて・考え・理解して～
(https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/hokenshido/2014/jireikento_report01.pdf)

文献

- 1) 吉池毅志，栄セツコ．保健医療福祉領域における「連携」の基本概念整理—精神保健福祉実践における「連携」に着眼して．桃山学院大学総合研究所紀要，34 巻 3 号，109-122，2007
- 2) 野中猛，野中ケアマネジメント研究会．多職種連携の技術—地域生活支援のための理論と実践．中央法規，2014

資料 3 評価に関する検討資料

1. 原内一, 他. インタラクティブ・ポートフォリオの構築. 川崎医療短期大学紀要 (38), 33-40, 2018
2. 松葉龍一, 小村道昭編著. 学生力を高める e ポートフォリオ. 東京, 東京電機大学出版局, 2018
3. 宮崎誠他. 看護基礎教育における e ポートフォリオ学習の実践報告 (第一報) (看護教育における e ポートフォリオ学習の導入). 幾央大学紀要 (15), 67-73, 2018
4. 鈴木敏恵. ポートフォリオで未来の教育 (次世代の教育者・指導者のテキスト). 東京, 日本看護協会出版会, 2019
5. 鈴木敏恵. ポートフォリオとプロジェクト学習. 東京, 医学書院, 2017
6. 田邊政裕監修. e ポートフォリオ (医療教育での意義と利用法). 東京, ベクトル出版, 2017
7. 横林賢一, 他. ポートフォリオおよびショーケースポートフォリオとは. 家庭医療 (15), 32-44, 2010
8. Dannelle D. Stevens, Antonia J. Levi (原著), 佐藤 浩章, 井上 敏憲, 俣野 秀典 (翻訳). 大学教員のためのルーブリック評価入門. 東京, 玉川大学出版部, 2014
9. 沖 裕貴. 大学におけるルーブリック評価導入の実際 ―公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して―. 立命館高等教育研究 (14), 71-90, 2014
10. 安藤輝次. 一般的ルーブリックの必要性. 教育実践総合センター研究紀要 (17), 1-10, 2008
11. 森田敏子, 上田伊佐子. 基礎からひもとくルーブリック No1 ルーブリック評価の基本. 看護展望 43 (8), 72-76, 2018
12. 森田敏子, 上田伊佐子. 基礎からひもとくルーブリック No2 ルーブリック評価表の作成方法. 看護展望 43 (9), 64-68, 2018
13. 森田敏子. 基礎から学ぶルーブリック評価 vol. 2 ルーブリック評価. 看護展望 42 (2), 73-77, 2017
14. 山野克明. 作業療法臨床実習におけるルーブリック評価の意義と課題. 熊本保健科学大学研究誌 (15), 121-132, 2018
15. 古城幸子, 木下香織. 老年看護学実習の教育評価にルーブリック評価表を導入して. 新見公立大学紀要 (34), 15-20, 2013
16. 岩井信彦, 大久保吏司, 小形晶子, 他. 臨床実習科目の成績評価 ―ルーブリック評価の導入―. 理学療法科学 33 (2), 365-371, 2018

2020 年度 保健医療総論改善ワーキング報告書

2020 年 11 月 9 日発行

作成 札幌医科大学保健医療学部保健医療総論改善ワーキンググループ

保健医療総論 1 担当：池田 望 （科目責任者）

齊藤秀和 （コアメンバー）

保健医療総論 2 担当：長谷川真澄（科目責任者）

菅原和広 （コアメンバー）

保健医療総論 3 担当：堀口雅美 （科目責任者）

青木信裕 （コアメンバー、保健医療総論教育評価ワーキング）

保健医療総論 4 担当：城丸瑞恵 （リーダー、科目責任者）

後藤葉子 （コアメンバー、保健医療総論教育評価ワーキング）

保健医療総論教育評価ワーキングリーダー：澤田いずみ